

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

調査対象地区は 150ha に及ぶ「ドゥラ・イェリ史跡保護地区」であり、東半部、狭義のドゥラ・イェリ地区と、西半部ハジュ・ムラト地区に分かれる。両地区は、DEM(デジタル標高モデル)データに基づく傾斜分布図によれば、もともと単一の都市計画によって成立した広大な古代都市の遺跡地区として、隣接・連続していながらも、それぞれ性格が異なる。すなわち、衛星写真では、前者に、12 世紀初頭、この都市が最終的に放棄された際の中期ビザンツ帝国、テマ・アナトリコン行政区首府の建築遺構跡を多数確認しうるのに対し、後者に、平面プランを明確に認識しうる建造物の痕跡は、後述の劇場跡、および 2m 程度の高さを持つ扇状地の人工的拡張部(200×300m)の他、確と見出しがたい。すなわち、前者は中世ビザンツ遺跡、後者は古代遺跡と特徴づけうるのである。

2024 年度、本研究は、4 月から 7 月の事前準備、9 月から 11 月の事後分析、12 月の中間成果論文発表を除けば、8 月における**現地表面調査**、および 10 月における**現地磁気探査**(イスタンブル工科大学ユクセル博士と、博士が代表者を務めるルメリ・ゼミン社への調査委託)を主たる 2 つの調査として遂行した。

まず**現地表面調査**開始に先立ち、2003 年、ハジュ・ムラト地区の北部区域において、遺跡を東西に貫く現代のボルバディン・チョバンラル間道路の直線化付け替え工事中、中期青銅器時代の 3 基のピトス墓が 3m の深さから発見されていたことを知った。早速、この墓域の現地調査後、衛星画像分析によってその位置の特定を試み、それが北側のパシャダー丘陵から延びる涸れ川(ワディ)のうち、最長のものが形成する最大の扇状地の扇央部上端に位置することを確認しえた。すなわち、直線化とともに扇状地形による路面のアップダウン解消も目論んだこの工事のため 3m も掘り下げる必要があったというほど、この地点は水平な遺跡全体の中で顕著な高まりを形成しており、都市集落形成以前の青銅器時代から、宗教生活の焦点たりうる要地であったと考えられよう。さらに、この扇状地扇端部の最南端に、直径 50m の半円形のすり鉢状の建造物の痕跡が存在していること、また、そこから南南東に幅 90m、長さ 120m におよぶ矩形の範囲に、南端部で 1～2m 程度の高さで、人為的盛り土が延長されていたことも確認しうる。この扇状地に対する人為的地形改変と矩形外延部付設、都市遺跡全体の中での中心的位置から、ここに、都市遺跡の中でも、古い歴史を持ち、重要な位置を占める遺構群が存在したものと期待でき、したがって、都市の起源を探る表面調査は、矩形外延部を中心とする東西 300m、南北 200m の範囲で行うこととした。

表面調査においては、この範囲について、50m×50m を一区画とし、計 24 区画の表面採取調査を実施した。その結果、少なくとも鉄器時代(前 8～前 2 世紀)に遡るとみられる灰陶、ヘレニズム時代(前 4～前 1 世紀)に遡る黒陶、ローマ時代の精製土器であるレッド・スリップが、少数採取された一方、古代末期(4～6 世紀)からビザンツ時代(7～12 世紀)の実用雑器(比較的品質の高いものから低い粗製土器まで)が多数発見された。また、ビザンツ中期(10～12 世紀)の彩釉陶器も 2 点発見された。特に、周囲より標高の高い矩形外延部からは、土器片のほか、おそらく古代末期に属すると思われる大理石製の祭器の底部と、EN と刻まれた部分が残った碑文小片(E の半月型字形から 2～5 世紀)が発見され、それによりまず近傍にキリスト教関係の施設が存在していたという可能性が、次いで、矩形区域の盛り土形状と都市全体の中での中心的位置から、ここにはキリスト教化以前に、古代の聖域(テメノス)が存在していたという可能性が、それぞれ考えられた。また、その北側に存在する半円形のすり鉢状地形は、その南側に東西方向の弦を持っており、それが人工物ならば、この都市が位置するアカルチャイ川形成平原の沃野の眺望を背景として建築された劇場であった可能性が高い。

以上のような推定の下、**磁気探査**を、上記 300m×200m の範囲のうち、とりわけ、将来の発掘にとって有望と思われる 2 箇所、すなわち、a)扇状地の矩形外延部先端付近の 100m×100m の範囲、および、b)半円形のくぼみを中心とした 75m×75m の範囲で行った。この探査法は、探査範囲に 1m×1m のグリッドを設け、各グリッドの隅において計測した磁気異常分布を以て地中建造物の存在を探るものであるが、その結果、a)の範囲では、劇場ならば、その座席(Cavea)に当たる部分の扇形の基礎構造体と、扇形の弦の部分に背景建物(Skene)の基礎構造体の痕跡を発見し、また、b)の範囲では、東西に軸線を持つ建物基礎の痕跡を北側に、南北に軸線を持つ建物基礎の痕跡を東南部に認めた。b)区域における二つの建物の性格については、発掘してみるまで特定しえぬにせよ、東西の軸線を持つ建築物は、通例、同じ軸線を持つ教会建築の可能性を(しかし、教会建築の場合に往々にして認められる東側のドーム部は確認できなかった)、南北の軸線を持つ建築物は、キリスト教化時代(4 世紀～)より時代を遡る、公共建築物であった可能性を、それぞれ認めた。以上から、26 年度以降の本発掘に向けて、25 年度に最初に試掘トレンチ(TTR1)を開く箇所を、この a)区画の、南北軸線遺構の存在が推定される場所の南側に定めることとした。

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

2025 年度、本研究は、4 月から 7 月の事前準備、9 月から 11 月の事後分析、12 月の中間成果論文発表の他、前年度に定めた地点(地点番号 A=38.68825N: 30.97441E)に試掘坑 **TTR1** の範囲を定め(南北 3m、東西 4m)、その試掘を 7 月 29 日から 8 月 29 日まで行った。以下、層位 6 層と生活フェーズ 4~5 面につき、時代の若い順に記す。

第 0 層。地表面から深さ 20 ㌢まで。表土層であり、考古学的には意味がなく、除去に努めた。

第 1 層。深さ 20 ㌢~80 ㌢。粗雑な造りの壁体(幅 60~80 ㌢)が、試掘坑を東北東から西南西へと斜めに横切る形で発見された。壁体の造りの粗雑さとその延長部の長さから、建物の壁ではなく、牧場の仕切り石柵の可能性が高い。壁体北西側には、深さ 65 ㌢のところ大きなタイルが敷き詰められていたが、壁体東南側には、同じ深さに 30 ㌢ほどの幅で 30 ㌢ほどの高さの石組み(**SW1**)が付設されており、そこに僅かな火痕と動物骨が発見された。その数十㌢南、同じく深さ 65 ㌢で締め固められた地面上には、中期ビザンツの雑器と見られる破片化した小鉢が原位置で発見された。以上から 65 ㌢の水平面を、**中期ビザンツの生活面を示すフェーズ 1**とみなすこととした。

第 2 層。深さ 75/80 ㌢~100 ㌢。特に上述の壁の北側には、建築材料や石臼など家庭用器具の断片が多く混在していた。**フェーズ 1**の壁の下、深さ 100 ㌢の水平面には、長さ 170 ㌢幅 70 ㌢高さ 20 ㌢、北東 - 南西軸線を持つ石組み(**SW2**)が見つかり、その北東端から北に 10 ㌢には、深さ 85 ㌢から 130 ㌢の位置に、両方の取手に十字を刻まれ、底面付近に穿孔を持つ短形アンフォラが、ほぼ完形で原位置に発見された。チーズ製造用の壺と考えられ、下三分の一が固められた粘土の台座に載せられていたが、幅広く漆喰舗床の痕跡が認められる深さ 100 ㌢の水平面が**フェーズ 2**の床面なら、その時期に、私邸もしくは工房で、掘り込んだ床に据え置いて使用されたものだろう。十字架を刻んだ壺が完形で発見されたことから、**フェーズ 2**は、6 世紀の地震により倒壊し、放棄された構造物のコンテクストに位置づくものと考えられ、この生活面は古代末期(4~6 世紀)に属するものと考えられる。

第 3 層。深さ 100 ㌢~120/130 ㌢。120/130 ㌢付近に広範囲に及ぶ漆喰床面が発見された。その一部は拳大の舗石の上、また大部分は突き固めた厚い土層(5-10 ㌢)の上に形成されており、この水平面は、**ローマ帝政期(1~3 世紀)**に属する**フェーズ 3**の生活面と考えられる。建築物の痕跡は、**TTR1**の狭い範囲からは、もしかすると**フェーズ 2**に関連付けられるかもしれない北西隅の漆喰モルタルと礫石から成る構造物の南端部以外、見出されなかった。ローマ時代の公共スペースに特徴的なモザイク舗床や石畳ではなく、私邸やアトリウムに特徴的な漆喰床面が現れたため、**TTR1**が都市の中心的公共スペースに位置するとした当初想定には疑いが生じた。今後、範囲を広げて本発掘を行うことで、建築遺構を見出して空間的特徴を特定するか、ないしは、少なくとも代替仮説を得たい。

第 4 層。今シーズン中に人為的生活面の痕跡を可能な限り多く確認するため、**TTR1**の東半部のみを掘り進むことを決定したが、130 ㌢~160 ㌢の土層は粘土質シルトを含む層位で生活面は確認されなかった。5~10 ㌢の粘土層は、その時期、この地域が湖沼の溜まり水下にあったことを示す可能性がある。

第 5 層。155/160 ㌢~220 ㌢。礫石を積んだ石組みが深さ 145 ㌢~190 ㌢に見つかった一方、その石組みの東延長上、160 ㌢~190 ㌢の深さに、上部に方形の石を置かれた 30 ㌢程度の丸い壺墓/骨壺が見つかった。石組みと壺の関係は不明であるが、壺自体は、鉄器時代(前 8 世紀~前 2 世紀)に特徴的な灰陶であったので、鉄器時代にこの地区が墓地とされていた可能性が高いながら(これを**仮フェーズ 4**とした)、石組み自体は、下記の青銅器時代中期の巨大ピトス墓の墓標で、鉄器時代には、埋もれていた墓標を崩す形で壺墓が埋設されたのかもしれない。

第 6 層。220 ㌢~340 ㌢。2 基の**青銅器時代中期**の巨大なピトス墓が南東隅に発見された。その時代の墓地使用局面を**フェーズ 5**とした。一方は完形で、もう一方は下半部が破壊され、その上に石積みが置かれた形で発見され、前者には中年男性が、後者には中年男女と子供の骨が発見された。後者の被葬者のうち、女性のみが屈曲位で完全な形で発見され、残りの二者の遺骨は著しく損壊していたので、追葬により破壊されたものと推察された。上記、2003 年の国道工事に伴って発見された 3 基のピトス墓と同じ時代に属するとすれば、そこから**TTR1**まで、少なくとも南北 250m という極めて広い範囲で、青銅器時代の一連の墓地を形成していた可能性が高くなった。直接の近隣に青銅器時代の居住集落は発見されておらず、4 km 南東のウチホク遺跡の墓地であったか、あるいは、未発見の青銅器時代集落の墓地であったか、ふたつの可能性が考えられるが、墓地自体の発掘は都市の直接の起源究明には繋がらないので、次年度以降の本発掘では、130 ㌢のローマ時代の生活面で発掘を留める計画である。

最後に、都市遺跡周辺の旧河道網を中心とする古環境に関する知見獲得をボーリング調査によって行う計画は未達に終わった。旧河道網は、ドウラ・イエリ史跡保存地区外の、私有地・町有地に存在したと考えられ、現在、農地として使用されているこれらの土地にボーリングマシンを入れて試料採取を行うことは困難であると判明した。また、史跡保存区域内でも、重要建築物の発掘を行い、建築物の不在を確かめられた区域で、かつ標高の低い、旧河道、ないし運河が入り込んできている区域でボーリング調査を行うことが、妥当手順であるとの結論に達した。

※この(様式 2)に記入の【経過・成果】の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

Urano, S., N. Koiwa, Y. Fukatsu, T. Hasegawa, I. Baytak, and Ö. Koçak, "Two Approaches in a Preliminary Archaeological Survey of Polybotos (Dura Yeri – Hacı Murat) prior to the Excavation", 『史苑』*Shien (The Journal of Historical Studies, Rikkyo University)*, 85-1, 2025 January, pp.221-246

Urano, S., Y. Fukatsu, İ. Gökalp, A. İ. Aytek, F. A. Yüksel, Ü. A. Y. Yavuz, N. Koiwa, A. Sağıncı, and Ö. Koçak, "Polybotos (Dura Yeri/Hacı Murat, Bolvadin Afyonkarahisar) Excavation: Interim Report 1", 『史苑』*Shien (The Journal of Historical Studies, Rikkyo University)*, 86-2, 2026 March, pp. 1-11